

**[紹介] 三木興吉郎編 三木産業株式会社刊「阿波
藍譜 : 栽培・製造篇」**

著者	津川 正幸
雑誌名	關西大學經濟論集
巻	10
号	1
ページ	50-59
発行年	1960-07-20
その他のタイトル	[Book-Review] Y. Miki, Awa-aifu.
URL	http://hdl.handle.net/10112/15558

紹介

三木與吉郎編 三木産業株式会社刊

阿波藍譜 栽培製造篇

津川正幸

阿波藍は、わが国の江戸時代以降において、諸国の国産品中でも著名のものであり、かつまた染料市場の取引において重要物資として君臨するほどの存在であつた。

この藍玉を取扱いはじめて二八〇年の歴史をもつ三木家は、第二世吉太夫高治の代より、現当主第十三世与吉郎氏にいたるまでの間、阿波国板野郡喜来浦（徳島県板野郡松茂村中喜来字中須）を本拠として、第八世与吉郎政治の代には、江戸日本橋本材木町に出店をかまえ、江戸進出による販路の開拓をなしとげ、爾来実質的な本拠は江戸出店にうつつたが、これによつてインド藍・人造藍の輸入・出現による阿波藍浮沈の危機をたえぬき、さらに営業種目の拡大をなし、今日その社運の隆昌を属目されている三木産業株式会社に発展している。今般同社より

阿波藍に関する史料集「阿波藍譜・栽培製造篇」が上梓され、学界におくられる運びとなつた。

同社はさきに、祖先伝来の地に三木文庫を設置し、阿波藍に関する修史事業に着手し、昭和三十年四月にこの事業の手はじめとして「出藍録」一卷を上梓し、ひきつづいて同三十一年七月には、阿波藍に関する史料目録、天然藍に関する文献解題（第一回）、天然藍の種類についての事項の収録内容をもつ「三木文庫所蔵庶民史料目録 第一輯」を、ついで同三十二年六月に、三木家第十二世与吉郎の遺稿、同年譜および阿波人の誌書等を収めた「愛松遺稿 上下二巻 一帙」を、さらに同年九月には、さきの史料目録第一輯の公刊以後わずかに一年余にして、阿波藍以外の庶民史料目録、天然藍に関する文献解題（第

二回)「三木文庫所蔵庶民史目録 第二輯」を刊行し、その矢継ぎばやの編集・刊行、しかもそれにもましての入念な整理と厳密な校正がなされていること、また豊富な図版の挿入による豪華な編集など至れり尽せりの周到さに、みるものの眼をみはらせたものである。

そのことは、これら諸本の刊行についての三木産業株式会社の理解と、直接その編集の衝にあたられた後藤捷一氏の手腕と努力に敬意をあらうともの、さらに三木家に久しく門外不出として大切に保存せられた膨大な量の古文書・記録の類の存在をしらされ、これらをさらに利用者の立場からして、より便利な形の史料集として刊行されんことを切望する声をたかからしめた。それは故魚澄博士をはじめとし、おおよそ史学の研究、とりわけ社会経済史学において江戸時代以降を研究の時代的範圍とする人々すべての心情でもあつた。⁽¹⁾

しかしながら、多少なりとも原史料を手がけ、あるいはすすんで庶民史料集の編集にたずさわつた人々であれば承知のことであるが、史料集の上梓ほど多大の手数と時間、さらに莫大な費用のかかる事業はない。したがつて原史料に即した研究が盛んになつても、それらは研究者個々人の情熱と努力によつて、

全国に散在するおびただしい庶民史料の中から、研究目標に合致した史料を求めて、山間僻地をもちとわず採訪した結果によつてなされたことであつて、その割合に多くの人の便宜、ひいては学界の利益となる基本的な事業であるところの、これらの史料そのものを整理し、これを編集刊行しようとする事業は、少数の事例をのぞいてはほとんどなされていまいと言つて過言ではない状態である。

このような史料集の出版状況のもとに、今般この「阿波藍譜・栽培製造篇」が三木産業株式会社の手によつて刊行されたことは、まさによろこばしい壮挙であり、また後藤捷一氏なる人をえてはじめてなした事業であることを再度確認する次第である。

さて本書にのせるところの内容は、

藍の栽培及製法、第十一世三木与吉郎稿

第一編 明治以前の伝授書

第二編 明治期の通誌

第三編 明治以後の研究

第四編 参考文献

第五編 解題

阿波藍譜 栽培製造篇 (津川)

附録 阿波藍に関する諸統計

の諸篇よりなり、本篇の頁数四四九頁・附録統計表八九頁、総頁数(折込みもあり)五三〇余頁にのぼるものである。そして挿入写真図版一四四図、その他カット図版一一四四図版余にあま文字通りの豪華本である。

少し詳細な内容について紹介しよう。というよりも、本書を手に入れば一目瞭然のことであるが、第一・二・三・四各編の書目の内容については、第五編、解題に極めて適切にして要を得た説明が用意されているので、この紹介もこの解題に即しておこなうことにする。

さて巻頭に掲げられた「藍の栽培及製法」一篇は、教科書体で漢字を五号活字、平仮名を九ポイント活字を使用しての別刷りである。これは第十一世与吉郎氏五二才の時の著述で藍種子、苗床の仕法、播種、苗床の管理、本畑への移植と管理、耕作用具、害虫とその駆除法、政獲までの諸作業を藍作の栽培過程にしたがつて順序よくその一般を述べ、さらに藍の製法に筆をすすめて、染(すくも)および藍玉の製法を記述したものである。

第一編 明治以前の伝授書として収録されているものは、藍

五二

作り方伝授書Ⅱと染製法伝授書Ⅱ右同輯八五頁に染製法秘伝として掲げられたもの、および藍の寝させ方(染の製法)Ⅱ本部中には、一貳番葉藍寝方・一藍元葉寝方とあり、史料目録第二輯二四九頁に葉藍寝方としてあげられている。三篇である。

いずれも年代的には比較的に新らしく、嘉永五年(一八五二)のものである。しかし阿波藍の栽培製造に関する文献としては、「私(後藤氏)の管見の限りに於て茲に紹介した二巻が唯一のもので、而も時代的に見て最も技術が発達専門化してからのものだけに貴重な記録」である。このように栽培製造に関する史料の残存率の低いことは、阿波藩がその技術の漏洩を極度に警戒したことに由来する。そのために、「虎の巻伝授」の形で技術の継承がなされたために、この種の史料は、「四十年に垂んとする私(後藤氏)の蒐書を以てしても、まだこの一書以外発見せられないのは、恐らく受伝者側が主に百姓であつたため保存の方面に全然無関心であつたか、それともあまり大切に仕舞ひ込んで却つて行方知れずとなつたものとしか推察せられない。」のような事情のもとにあるものである。ただ、ここで後藤氏は、この卷子仕立ての伝授書が阿波国内でも相当数伝授されたであろうとの見通しの上で、その残存率が低く蒐書しがたい

ことを述べておられ、言外に未だ何処かに忘れられて存在し、なおあくことなく求められるような希望的可能性を残しておられる。しかし全くの素人考えではあるが、巻子仕立ての「虎の巻伝授」がはたしてそんなに相当数なされたものか。むしろ伝授はある特定の百姓に限られ、あとは口伝あるいは、言わずかつたらずの实地指導で技術が継承されたのではなからうか。したがって本来伝授書は少数のものであつたと考えられないものか、との疑問をもつ次第である。そうであるとするならば本書の蒐集はまことに貴重なものである。

いま一度阿波藍の栽培・製法についての阿波藩の方針に注意すると、他の諸藩の国産奨励策にその例が多々みられると同様に絶対秘密主義がとられていた。その政策のあらわれ方の一例を藍作日雇人の詮義についての史料にみると、

藍玉仕方演説の事^(一)

文化十四年四月北方村々組頭庄屋共へ演説の事

御国産藍玉仕方の儀は、諸国に類はこれなき事に候。しかるに不心得の藍師これあり、出生あいわからざる日雇人(を)年来召仕い候処より、自然寝床の義なども取扱わせ、その者寝床の工合相覚え候上、生国へまかり帰り候て、御国産藍玉仕立ての通

阿波藍譜 栽培製造篇 (津川)

りその国々へ相弘め、御産物の害(に)なり候儀相わきませざる者も端々これある趣相聞え如何の事に候。よつて別紙に相頭れこれある伯州のみに限らず、藍作出来の国より日雇人ていに相紛れ、入り込み候義もはかりがたく候間、組内藍師共呼び寄せ、右の次第重々示し置くべく候。万一以後不心得の義これあるにおいては、無手当申し付く義に候条この段相含み細かに申し付くべく候。

但し日雇人召し仕し候義は、去る午年御郡代所より融達しこれある懸りに候事。

と藍作地帯である吉野川北岸方面(北方と呼ばれている)の組頭庄屋に注意を喚起しているような状態であつて、このようなことから技術伝授の秘密主義がうかがわれるところである。いずれにしても明治以前の文献として右文書が収録されたことは、「阿波藍譜」の一巻の価値を高からしめるものであり、かつまた従来空白のままに残されていた江戸期の阿波藍作の技術的研究を満すにたるものといわなければならない。

ついで第二篇 明治期の通誌には、安岡百樹著 阿州産藍之説と椎野宰資著 阿波国藍業略誌の二書がおさめられている。

前者は阿波藍に関する著述のうちで、図書らしい図書とし

阿波藍譜 栽培製造篇 (津川)

五四

ての嚆矢とされている。本譜に収録するにあつては、秋田県立図書館所蔵本を底本とし、国会図書館所蔵本および後藤氏所蔵本を校合して収録されている。

一方阿波国藍業略志は前者にややおくれ、明治二十三年二月に出されたものである。同略志はすでに昭和二十九年六月刊、日本農業発達史第三巻の資料・複製篇に複製掲載されているが、この分には藍作工程図と農器具の図が省略されている。これは阿波藍譜と日本農業発達史の双方が使用した底本による相違であるが、折角の説明をたすける工程図(その図がたとえ稚拙な図であつたとしても、それだけに地方色が出ていると思われる。)と細大漏らさず精緻な墨線描きの農器具図が省略されたことはおしむべきことである。

さて産藍之説と藍業略志のなりたちおよび内容を比較すると、前者が大蔵権中録であつた安岡百樹によつて著述されたものでありながら、如何なる目的で記述され、どのように利用されたかは詳らかではない。これに比して後者は、徳島県第一部農商課員の椎野幸資によつてあらわされたもので、いずれも現地に赴き、実地に見聞し採録したものであつたが、著者が緒言に明記しているように、「阿波国藍業歴史ヲ編纂セント欲ス

ルノ目的アリテ其材料蒐集ノ条件中ヨリ要旨ヲ摘記シ以テ事業者ノ参考ニ供セシモノナレハ只僅カニ事実ノ一斑ヲ窺フニ過キサルノミ故ニ隔靴搔痒ノ憾多カラン読者之レヲ諒セヨ。」との目的によつたものである。時あたかも阿波藍にとつては強敵インド藍の輸入が漸次増加し、明治二十一年にはその量二十八万斤をかぞえ、これがやがて三十三年には百八十五万斤を記録するにいたる増加状態で、これにたいする対策が考慮されていた時期であつた。⁽³⁾

さて両者の内容についてであるが、その項節のたてかたなどに多少の類似があるように思われる。ちなみにそれぞれの内容を仮りに目次として対照すると、

(阿州産藍之説)

(阿波国藍業略志)

- | | |
|----------|------------|
| 1 異称之事 | 1 藍作地図 |
| 2 品種区別 | 2 藍作業の沿革 |
| 3 藍草の起原 | 3 質地 |
| 4 藍を作る地名 | 4 作付反別及収穫 |
| 5 土質品別 | 5 葉藍栽培法 |
| 6 培養 | 6 藍作前後の植物 |
| 藍実蒔 | 7 種子及藍草の種類 |

苗代 8 肥料及其施用之慣例

培養 9 驅虫

苗栽 10 灌水

肥料 11 農具並製藍用具

7 収穫 12 藍玉菜製造法

8 藍実撰収 13 葉藍及玉・菜の名称並俵作の区別

9 豊凶 14 葉藍及玉・菜の売買及其慣習

10 諸虫の災害 15 藍大市

11 諸虫災害除去の法 16 耕耘之部藍相場及輸出高

12 諸用具用法 耕耘之部

収採用具即こなし道具之部

菜製之部 17 売場先組合地区

藍玉製造之部 18 旧藩制度及藍商取締

13 菜製法 19 外国産藍醜の輸入並印度産藍地の景況

14 藍玉製法 20 人工藍醜の説

15 藍汁出方並染法

斃製

灰汁製方

煙草藍灰

16 藍税法則

俵量定則

藍俵並税の高縮

17 関東筋藍売大概

藍価談判定例

藍の上中下を検査する法

藍玉俵改量

藍玉俵正雜分部定則

藍玉一俵正味重量十貫八百目程価算則

「又引」と称する算法

藍玉俵雜費

のようなそれぞれの内容である。

さて第三編、明治以後の研究の所収内容は四篇にのほり、その第一は、明治二十六年四月国立農事試験場官制の公布があり、東京および大阪・宮城・石川・広島・徳島・熊本の各地に農商務省農事試験場および支場が設置された。これらの試験場および支場においては、農業における、栽培・製造の諸般にわたつて試験を実施しその成果を「農事試験場成績」に逐次報告

阿波藍譜 栽培製造篇 (津川)

五六

し、農業の発達に意を用いた。このようなかきの中で明治二十九年には技師吉川祐輝博士によつて徳島県下の藍作法の調査がおこなわれ、その結果が同三十一年八月、「農事試験場特別報告」第二号として発行された。これが本第三編の「阿波国藍作法」である。ついで翌三十二年一月、「農事試験場特別報告」の第三号として発行されたものが、つづいて本編におさめられた。町田咲吉博士の手になる「蓼藍及其製品ニ関スル研究成績」である。つぎにのせるところは大正四年三月刊、徳島県立農業試験場編「阿波の藍作」である。本書はさきの吉川博士調査報告の「阿波国藍作法」を底本としその後の試験成果を附加したものである。いま両者の内容を目次に従つてみると、

(阿波国藍作法)

1 阿波国に於て耕作する藍草

(1) 種子及発芽

(2) 生長

(3) 花

(4) 含有色素

(5) 藍草の三主要成分

(阿波の藍作)

1 阿波藍栽培の起原及沿革

2 阿波国に於て耕作する藍特性

(A) 種子及発芽

(B) 生長

(C) 花

(D) 含有色素

(E) 藍草の三主要成分

2 藍作地方の位置・地質・土

性及気候

3 藍耕作法

(1) 播種期

(2) 本畑一反歩に要する苗

床の面積及播種量

(3) 苗床整地・施肥及播種

法

(4) 苗床の肥料

(5) 苗床の手入及追肥

(6) 苗床に於ける諸害

(7) 風除け

(8) 移植期

(9) 本畑整地

(10) 畦幅・株間一株の苗数

(11) 苗の抜取

(12) 苗床の跡地

(13) 移植法

(14) 本畑の肥料

3 気候

4 土質

5 品積

6 採種方法

7 浸種

8 苗床の整地

9 播種期

10 苗床の面積及播種量

11 苗床の肥料

12 苗床の手入及追肥

13 苗床の諸害

14 移植期

15 本畑整地

16 畦幅及株間

17 苗の抜取

18 苗床の跡地

19 移植法

20 本畑の肥料

- (15) 移植後培養法
- (16) 灌水
- (17) 収穫期
- (18) 収穫法
- 4 葉藍の調整
 - (1) 収穫より乾燥に至るまでの手続
 - (2) 乾燥及調整
- 5 害虫及害虫に対する処置
 - (1) 蚜虫
 - (2) クチトガリ
 - (3) ヘウタンムシ
 - (4) 根切ムシ
 - (5) ウラムシ
 - (6) 地蚕
- 6 二番葉藍及摘梢法
- 7 藍の耕作及葉藍の調整に要する器具
- 21 施肥法
- 22 移植後の管理
- 23 灌水
- 24 収穫期
- 25 収穫法
- 26 葉藍調整法
- 27 藍の害虫
 - (A) 蚜虫
 - (B) クチトガリ
 - (C) ヒョウタンムシ
 - (D) 根切ムシ
 - (E) ウラムシ
- 28 二番葉及三番葉収穫法

- 8 蓼藍の品質
 - 9 蓼種子
 - (1) 種子産出地
 - (2) 種子用藍栽培法及種子採取法
 - (3) 種子の販売
 - 10 藍作前後の作物
 - 11 葉藍の鑑定
 - 12 藍作の収支計算
 - 29 葉藍の鑑定
 - 30 染藍の製造法
 - 31 藍玉の製造法
 - 32 藍玉及染藍の鑑定法
 - 33 栽培反別及産額
 - 34 販売先用途及農家の売払価格
 - 35 耕作地の時価
 - 36 一反歩収支計算
 - 37 藍作の前後農作物
- の諸項目で類似の点が判明する。最後の一篇は「阿波藍の寢床」、すなわち葉藍より衰を造るために使用する家屋「ねせどこ」について実測図および十四図の写真図である。

阿波藍譜 栽培製造篇 (津川)

五八

三木文庫では、阿波藍の衰微とともに、本来の使用価値を失い、あるいは改造転用され、あるいはまた荒廢、とりこわしにあつて日一日とその影を没しつゝある「ねせどこ」を措み、その全貌を後世に伝える目的から、徳島工業高校建築科の酒巻・平野両氏に委嘱して実測・写真撮影したものである。筆者も幼少時を阿波にすぎし田園にたちならぶ白壁の「藍屋の納屋」(納屋と寢床は別の物であるが)を見聞きはしていたが、その内部構造については全くすることがなかつたので、興味深い一篇となつた。

第四編、参考文献は、阿波以外の栽培及製法に関する文献を抜率収録したもので、「農業全書」をはじめとし、会津農書、会津歌農書、経済要録、草木六部耕種法、種樹園法並奥秘、藍作仕法書、ある作手引艸、齋民要術、天工開物、箋注倭名類聚抄、倭漢三才図会、重修本草綱目啓家、親民鑑月集、藍耕作の図解説などの多きにおよび、殆ど藍作に関する関係文献は残らず取り入れられているといつても過言ではなからう。

以上で本編は第五編の解題を加えておわる。なお附録として阿波藍に関する諸統計が収録されている。これらの統計は明治元年より昭和十四年にまでおよんでおり、阿波藍の盛衰をしる

に恰好のものであり、また近代の産業経済の史的研究に大いに役立つ資料である。表題のみを掲げておくと、

- 1 阿波藍作反別累年対照表 (明治一四年より昭和一四年まで)
- 2 同内訳年表
- 3 阿波製藍(菘・藍玉)累年対照表 (明治三八年より昭和一三年まで)
- 4 同内訳年表
- 5 阿波藍玉・菘移出累年対照表 (明治一五年より昭和一四年まで)
- 6 同内訳年表
- 7 阿波藍供給累年対照表 (明治四年より昭和一〇年まで)
- 8 同内訳年表
- 9 阿波藍移出累年対照表 (明治四二年より大正三年まで)
- 徳島港積出表 (大正四年より昭和三年まで)
- 小松島港積出表 (大正四年より昭和四年まで)
- 撫養港積出表 (大正一三年より昭和四年まで)
- 古川港積出表 (明治一七年より昭和二年まで)
- 10 阿波藍相場累年対照表 (明治一三年より昭和一四年まで)
- 11 阿波藍関係者累年対照表 (明治一三年より昭和二四年まで)

12 阿波藍商會社累年対照表 (明治一三年より昭和三年まで)

13 内地に於ける製藍生産累年対照表 (明治二五年より大正一五年まで)

14 内地に於ける主要製藍作付面積表 (明治二五年より五年間隔) (大正五年まで)

15 天然乾藍輸入累年対照表 (明治元年より同三〇年まで)

16 人造藍輸入累年対照表 (明治三五年より大正三年まで)

その他五表がおさめられている。

以上「阿波藍譜・栽培製造篇」一巻の内容を概観した。まことに編集のきざしは鮮かであり、解題編の用意もさることながら、本篇中にも傍註あるいは別註を附して、出典、原語、方言などの説明、考証がなされている。校正も厳正であるが、正誤表のほかに筆者の気付いた誤植と思われる箇所は第二編の四六頁・藍正・倭正雑分部定則が藍玉・倭正雑分部定則であることと、第三編二一七頁下段、木屋平のルビが木屋平こやへいとふられるべきだと思われた二箇所であつた。とはいえこれらの誤植はなんら本書の価値を削減するものではない。

なお希望事項としては、第四編、草木六郎耕種法、種樹図法並奥秘、種樹園法奥秘の特種な漢字の字訓を他と区別して左ルビにしておられるが、原書は別として右ルビされた箇所(三八

二頁下段・葉洗村)もあることだからむしろ、右ルビに統一していただければ、それになれたわれわれには幸甚である。

最後に、本書刊行にあたり、その費用を措みなく投ぜられた三木産業株式会社および三木与吉郎氏ならびに献身の努力をいたされた後藤捷一氏に深謝すると共に、協力された各位ともども加饗を祈り、所期の計劃に入れられたであろう、農芸化学編、社会経済編等々の順調な進行を祈る次第である。

註(一)ヒストリア二一号 紹介三木文庫所蔵 庶民史料目録

第二輯 魚澄博士稿

(2) 御大典記念 阿波藩民政資料(下巻) 一七八七頁

(3) 社会経済史学 二五の六 明治時代の阿波藍 後藤捷

一氏稿